

# 侯方域「詠懷詩」訳注 (全)

On the translation and annotation of the Yong huai poems of Hou fang yu

藤井良雄

FUJII Yoshio

(国語教育)

(平成二十二年九月三十日受理)

はじめに

侯方域「詠懷詩」二十一首・丙戌（二六四六年）作

本訳注は、拙稿「明末清初の詠懷詩」(『中国詩人論 岡村繁教授退官

其一

記年論集』汲古書院1988) を発表した際の基礎的資料として作成した訳

注の補充版である。前稿「侯方域『詠懷詩』注釈」(上)(福岡教育大学

紀要第三十七号 第一分冊) には、其十一までを掲載し、また附録とし

て「侯方域伝」(清史編輯委員会編『清代人物伝稿』上編第一巻・中華

書局1984・羅明「侯方域伝」日記) を掲載した。本稿では羅明「侯方域

伝」は、紙幅の関係から割愛している。また、前稿をできるだけそのま

ま踏襲しているが、修正改良を加えたところがある。底本は、『壯悔堂

詩集』(卷之四・上海彪蒙書室藏版) で、詩題下に「丙戌作」と自注が

あり、また終末には「二十一篇、気格高逸……」と、「同里」の賈開宗

らの総評的な注記が施されている。

1 虞舜昔端委 虞舜 昔 端委にして

2 安坐彈鳴琴 安坐して鳴琴を弾ず

3 薰風習習至 薰風習習として至る

4 貴適無為心 無為の心に適ふを貴しとす

5 道高一何逸 道高くして一に何ぞ逸なる

6 五絃餘清音 五絃 清音餘す

7 玄化非有形 玄化 形あるものにあらず

8 奈何任鈞深 奈何ぞ 鈞深に任せんや

1〔禮記樂記〕昔者、舜作五絃之琴、以歌南風。

〔左思「呉都賦」(文選卷五)〕蓋端委之所彰、高節之所興。劉淵林注曰左氏傳(哀公七年)太白端委以治周禮。端委、禮衣。委貌謂冠、袖長而裳齊委齊至地也。

2〔阮籍「詠懷詩」其一〕起坐彈鳴琴

3〔左思「魏都賦」(文選卷六)〕惠風如薰、甘露如醴。李善注曰、孔子家語、舜曰南風之薰兮、可以解吾民之慍。

4〔論語・衛靈公〕子曰、無為而治者、其舜也與。夫何為哉、恭己正南面而已矣。

5〔史記・日者列傳〕道高益安、勢高益危。居赫赫之勢、失身且有日矣。

6〔淮南子・詮言訓〕舜彈五絃之琴而歌南風之詩、以治天下。

〔淮南子・兵略訓〕因形而與之化、隨時而與之移。夫景不為曲物直、響不為清音濁。

7〔曹植「責躬詩」(文選卷二十)〕玄化滂流、荒服來王。李善曰、玄道也。謂道德之化也。蔡邕邕陳留太守頌曰、玄化洽矣。

〔文子道原〕有形則有聲、無形則無聲。有形產于無形、故無形者有形之始也。

8〔周易繫辭傳上〕備勿致用、立成器以為天下利、莫大乎聖人。探賸索隱、鈎深致遠、以定天下之吉凶、成天下之亹亹者、莫大乎蓍龜。

昔、舜帝は朝廷の礼服のまま、ゆったりと琴を弾いたという。温和な風がそよそよと吹いてきて(民の心を和やかにする)舜の政治は、無為の(治の)心に適うことを貴ぶ。道が高尚であれば本当に何と安楽なことであろう。五絃の琴の音は清らかなことだ。舜の至徳の教化は眼で見えるような形のあるものではないのだから、どうして深く探りを入れることなどできようか。

其二

1 鳳凰自天來 鳳凰 天より來り

2 三顧頗廻翔 三顧 頗る廻翔す

3 羽儀肅威潔 羽儀 威潔ととの肅ほり

4 一鳴振南方 一たび鳴きて南方に振るふ

5 碧梧結秋實 碧梧 秋實結び

6 晚啄亦何妨 晚啄 亦た何ぞ妨げんや

7 嗟彼稻梁群 嗟あ 彼の稻梁に群して

8 徒以參中腸 徒だ以て中腸やしな參ふのみ

9 千仞飛空虛 千仞 空虛に飛べば

10 胡為籠與房 籠と房と胡いか為んせん

11 岐周有聖人 岐周に聖人あり

12 乃始下朝陽 乃ち始めて朝陽下る

13 若非感玄徳 若し玄徳に感ずるに非ざれば

14 豈棲枳棘傍 豈に枳棘の傍に棲まんや

1 〔阮籍「詠懷詩」其七十八〕林中有奇鳥 自言是鳳凰

〔嵇康「幽憤詩」〕匪降自天 寔由頑疏

2 〔三國志・蜀書・諸葛亮傳「出師表」〕先帝不以臣卑鄙、猥自枉曲、三顧臣於草廬之中。

〔阮籍「詠懷詩」其七十八〕一去崑崙西 何時復廻翔

3 〔嵇康「兄秀才公穆入軍贈詩」〕抗首漱朝露 晞陽振羽儀

4 〔史記・滑稽列傳〕王曰、此鳥不飛則已。一飛冲天。不鳴則已。一鳴

驚人。

〔阮籍「詠懷詩」其十五〕修容耀姿美 順風振微芳

5〔杜甫「秋興八首」〕香稻啄餘鸚鵡粒 碧梧棲老鳳凰枝

〔三國志・魏郡顛傳・劉楨「與曹植書」〕採庶子之春華、忘家丞之秋實。

7〔杜甫「同諸公登慈恩寺塔」〕君看隨陽雁 各有稻梁謀

8〔荀子・榮辱〕芻豢稻粱

9〔賈誼「弔屈原文」(文選卷六十)〕鳳凰翔于千仞兮 李善曰、文子曰、鳳凰飛千仞、莫之能致也

10〔周禮・夏官司・弓矢〕充籠箛矢。注、籠竹箛也。

〔春秋左氏傳・宣公十二年〕納諸厨子之房。注、房前舍也。

11〔孟子・離婁〕文王生於岐周、卒於畢郢、西夷之人也。

12〔詩經・大雅・卷阿〕鳳凰鳴矣、于彼高岡 梧桐生矣 于彼朝陽

13〔尚書・舜典〕重華協于帝。濬哲文明、温恭允塞、玄德升聞、乃命以位。

14〔後漢書・九覽傳〕(王) 渙謝遣曰、枳棘非鸞鳳所棲、百里豈大賢之路。

鳳凰が天からやってきて、三たび見廻して、よほど飛び戻ろうとした。その羽振りには威儀があつてよく整つており、一度鳴くと清らかな香りを振りまくようだ。碧梧は秋になつて実を結び、遅れて啄んでも何にも妨げはない。ああ、あの稲梁に群がる鳥たちは、ただ自分の腸を肥やしているだけだ。千仞の虚空を飛翔する鳳凰にとつて、えびらや矢筒など何にもならない。岐周に(鳳凰のような)聖人がいて、ようやく岐山の東面を下つた。もしも、彼の深い徳に感じ入ることがなかったら、どうして苦痛の枳棘の傍に棲んでおれようか。

其二

1 千秋風雅堂 千秋 風雅の堂

2 入室蘇與李 室に入るは蘇(武)と李(陵)と

3 陰山夏雪飛 陰山 夏 雪飛び

4 酪漿寒愈旨 酪漿 寒くして愈、旨し

5 漢恩誠不厚 漢恩 誠に厚からずや

6 去留從茲始 去留 茲より始まる

7 馬首陳鄙詞 馬首に鄙詞を陳ね

8 願過北平趾 願くば北平の趾を過ぎん

9 豈不戀故鄉 豈に故郷を恋はざらんや

10 高義愧君子 高義 君子に愧ず

11 少卿盛文采 (李) 少卿 文采盛んにし

12 零落亦如此 零落 亦た此くの如し

1〔阮籍「詠懷詩」其十九〕千秋萬歲後 榮名安所之

〔蕭統「文選序」〕風雅之道、燦然可觀。

2〔論語・先進〕子曰、由也升堂矣、未入於室也。

3〔陸機「飲馬長城窟行」(文選卷二十八)〕驅馬陟陰山 山高馬不前 李善曰、漢書(匈奴傳)曰、侯應上書曰、臣聞、北邊塞至遼東、外有陰山。

〔宋玉「招魂」〕魂兮歸來、北方不可以止些。增冰峨峨、飛雪千里些。

4〔李陵「答蘇武書」(文選卷四十一)〕羶肉酪漿、以充飢渴。李善曰(漢書西域傳)烏孫公主歌曰、穹廬爲室兮旃爲牆 肉爲食兮酪爲漿。

5〔同右「答蘇武書」(李)〕陵雖孤恩、漢亦負德。李善曰、言陵無功、以報漢爲孤恩。漢戮陵母、爲負德。

〔王維「李陵詠」〕少小蒙漢恩 何堪坐思此

6〔嵇康「琴賦」〕齊萬物兮超自得 委性命兮任去留

〔阮籍「詠懷詩」其五〕零落從此始

7〔沈約「齊故安陸昭王碑文」〕北風未起、馬首便以南向。

8〔史記・李將軍列傳〕於是天子乃召拜（李）廣爲右北平太守。廣居右北平。匈奴聞之、號曰、漢之飛將軍、避之數歲、不敢入右北平。

9〔蘇武「詩四首」〕（文選卷二十九）征夫懷遠路 遊子戀故鄉 李善曰、

漢書（高帝紀）高祖謂沛父兄曰、遊子悲故鄉。

10〔沈約「宋書謝靈運傳論」〕英辭潤金石 高義薄雲天

〔江淹「詣建平王上書」〕（文選卷三十九）虧名爲辱、虧形次之 李善

曰、尸子曰、衆以虧形辱、君子以虧義爲辱。

11〔吳質「答東阿王書」〕發函伸紙、是何文采之巨麗、而慰愈之綢繆乎。

12〔江淹「雜體詩三十首」〕班婕妤・詠扇 君子恩未畢 零落在中路

永遠に称えられ文学の殿堂、この殿堂に入れるほど拔群なのが蘇武と李陵とである。辺境の陰山では夏でも風に雪が舞うが酪漿は寒ければ寒いほど美味しい。漢の恩は本当に厚くなかったのだろうか。行くと留まるとの別がここから始まる。漢に帰る蘇武の馬首のところ、拙い言葉を陳ね、あの李廣將軍が陣取った北平を訪れてみたいと願った。どうして故郷が恋しく思わないことがあるか。高潔な忠義を遂げられないことが君子として恥じるべきことなのだ。李陵は文采を盛んに上げはしたが、このように零落したのは致し方ないのだ。

#### 其四

1 種穀城西村 穀を種う 城西の村

2 夜出村西道 夜出づる 村西の道

3 聚落生吹煙 聚落 吹煙生じ

4 場稼互収保 場稼 互に収保す

5 明月照大荒 明月 大荒を照らし

6 零露寒宿草 零露 宿草に寒し

7 啾啾雙黃鵠 啾啾として 雙黃鵠

8 化爲白頭老 化して白頭翁と爲る

9 似言慶曆間 〔隆〕慶（萬）曆の間と言ふがごとし

10 涕淚洒清昊 涕淚 清昊に灑ぐ

11 戰伐三十年 戰伐の三十年

12 常思太平好 常に太平の好きを思ふ

1〔漢書・食貨志〕種穀必雜穀以備災害。

2〔杜甫「日暮」〕將軍別換馬 夜出擁雕戈

3〔蘇軾「東坡八首」〕穿城過聚落 流惡壯蓬艾

〔陸游「過村店有感」〕炊煙生旅竈 野水漱寒沙

4〔毛詩・豳風・七月〕九月築場圃、十月納禾稼。毛傳曰、春夏爲圃、

秋冬爲場。

〔史記・廉頗藺相如列傳〕（李牧）爲約曰、匈奴即入盜、急入収保。有敢捕虜者斬。匈奴每入烽火謹、輒入収保、不敢戰。

5〔阮籍「詠懷詩」其十八〕微風吹羅袂 明月耀清暉

〔謝榛「塞下」〕霜連窮海夕 月照大荒秋

6〔陸機「園葵詩」〕（文選卷二十九）零露垂鮮澤 朗月耀其輝 李善

曰、毛詩（鄭風）日野有蔓草 零露瀼瀼

〔江淹「雜體詩三十首」〕陸平原・羈臣（文選卷三十一）徂没多拱木

宿草凌寒煙

7〔玉臺新詠・古樂府隴西行〕鳳凰鳴啾啾

〔阮籍「詠懷詩」其十〕寧與燕雀翔 不隨鴻鵠飛

8〔曹丕「與吳質書」〕已成老翁、但未白頭耳。

10〔王粲「贈蔡子篤」詩一首〕中心孔悼 涕淚漣而。

〔謝靈運「擬魏太子鄴中詩八首」平原侯植〕哀音下廻鶻 餘哇徹清昊

11〔三國志・魏書・辛毗傳〕連年戰伐、而介冑蟻蝨、加以旱蝗、饑饉並臻。

12〔干寶「晋紀総論」〕雖太平未治、亦足以明吏奉其法、民樂其生、百代之一時矣。

穀物を植え付けている城西の村、夜、城西の道を出かけて来ると、村の聚落からは籠の煙が立ちのぼり、どの家でも取り入れ場には作物が集積してある。明月は原野を照らし、降りる霜は宿草に寒冷である。啾啾と鳴き天空を飛ぶ二羽の黄鵠、年老いて白髪頭の翁となってしまった。今こんな時、あの隆慶（一五六七―七二）萬曆（一五七三―一六二〇）年間の平和な時代なのだと言っているようだ。（そのような鳴き声を聞けば）涙が湧いて清天に流れ注ぐ。三十年このかた戦伐が続き、常に太平の世の好きを思っていた。

其五

1 南方有美人 南方に美人あり

2 永矢發清歌 永く清歌を發せんことを矢ふ

3 跋涉往從之 跋涉し往き之に従はんとするも

4 蹇裳不能過 裳を蹇<sup>か</sup>げて 過ぐるあたはず

5 豈無舟與梁 豈に舟と梁となからんや

6 晏安徒蹉跎 晏安 徒だ蹉跎たるのみ

7 精衛尚填海 精衛 尚ほ海を填<sup>み</sup>め

8 何況但江河 何ぞ況んや但だ江河のみおや

9 蛾眉苦易盡 蛾眉 苦だ尽き易く

10 黄金焉用多 黄金 焉くんぞ多きを用ゐん

11 君子崇令名 君子 令名を崇<sup>ぶ</sup>び

12 嗟哉老則那 嗟<sup>あ</sup>哉 老ゆれば則ち那<sup>いか</sup>んせん

1〔阮籍「詠懷詩」其十五〕西方有佳人 皎若白日光

2〔毛詩・衛風・考槃〕獨寐寤言 永矢弗諼

〔陸機「前緩生聲歌」〕太容揮高絃 洪涯發清歌

3〔毛詩・鄘風・載馳〕大夫跋涉 我心則憂

〔張載「擬四愁詩」〕我所思兮在營州 欲往從之路阻脩

4〔毛詩・鄭風・蹇裳〕子思思我 蹇裳涉漆

5〔陶潛「擬古詩一首」〕豈無一時好 不久當如何

〔毛詩・大雅・大明〕造舟爲梁 不顯其光

6〔陶潛「答龐參軍」〕豈忘晏安 王事靡寧

〔阮籍「詠懷詩」其四十三〕願爲三春遊 朝陽忽蹉跎

7〔江淹「雜體詩三十首」〕阮步兵・詠懷（文選卷三十一）精衛銜木石 誰能測幽微 李善曰山海經（北山經）曰、發鳩之山有鳥名精衛。赤帝之女娃。女娃遊於東海、溺而死。不反、化爲精衛。常取西山木石以填東海也。

8〔阮元瑜「爲曹公作書與孫權一首」〕（文選卷四十二）江河雖廣 其長難衛也。

9〔陸機「日出東南隅行」〕美目揚玉澤 蛾眉象翠翰

10〔阮籍「詠懷詩」其七〕黄金百鎰盡 資用常苦多



11〔江淹「雜體詩三十首」王侍中・懷德（文選卷三十一）〕福履既所綏  
千載垂令名

12〔陸機「歎逝賦」時飄忽其不再 老晚晚其將及

南方には、よき人がいて、いつまでも清歌を唱い続けることを誓っている。山川を跋涉して行き彼の人にお供したいのだが、水が深く裳もすそを蹇かかげ渡ることもできぬ。まさか舟も橋梁も無いなどということがあろうか（と思ひあぐねているうちに）、安逸の日々は忽ち無駄にして（過ぎ去つて）しまった。あの精衛は、それでも大海を埋めようとしているのは、どうしてただ江河だけと限れよう。蛾眉の美人の容貌も甚だ移ろいやすく、黄金もどうしてたくさん費やすことができようか。君子はよい評判を尊ぶのであり、ああ、嘆かわしいのは老いさらばえてはどうしようもない。

其六

- |          |                       |          |
|----------|-----------------------|----------|
| 1 奔霆激雲中  | 奔霆                    | 雲中に激し    |
| 2 長虹亘天外  | 長虹                    | 天外に亘る    |
| 3 造化忽不常  | 造化                    | 忽として常ならず |
| 4 陰晴適以會  | 陰晴                    | 適、以て會す   |
| 5 君子安義命  | 君子                    | 義と命とに安んじ |
| 6 履順無顛沛  | 順を履み                  | 顛沛なし     |
| 7 紛紛僥倖子  | 紛紛たる                  | 僥倖の子     |
| 8 嗟爲寵祿害  | 嗟                     | 寵祿に害せらる  |
| 9 猶龍戒泰淫  | 猶龍                    | 泰淫を戒め    |
| 10 旨哉若龜艾 | 旨 <small>よ</small> き哉 | 龜艾のごときは  |

1〔蘇軾「芙蓉城詩」〕夢中同躡鳳凰翎 徑度萬里如奔霆  
2〔阮籍「詠懷詩」其四十二〕包冠切浮雲 長劍出天外

3〔戴良「四景樓記」〕天地之造化不常而山川之風氣固在。

4〔白居易「遊悟真寺詩」〕昔日間白雨 陰晴同一川

5〔韓詩外傳〕安命養性者、不待積委而富。

〔禮記・祭義〕尊仁安義、可謂用勞矣。

6〔顏延之「演連珠」〕蓋聞匹夫履順則天地不違一物、投誠則神明可交。

〔歐陽建「臨終詩」（文選二十三）〕況乃遭屯蹇 顛沛遇災患 李善曰、

論語（里仁篇）子曰、顛沛必於是。

7〔管子・樞言〕紛紛乎若乱絲 遺遺乎若有從治。

8〔阮籍「詠懷詩」其八〕膏火自煎熬 多財爲患害 布衣可終身 寵祿

豈足賴

9〔史記・老子傳〕孔子去、謂弟子曰、吾今日見老子、其猶龍邪。

〔漢書・嚴安傳〕養失而泰、樂失而采、教失而偽。偽采淫泰、非所以

範民之道也。

10〔周易・繫辭上傳〕探賾索隱、鈎深致遠、以定天下之吉凶、成天下之

臆臺者、莫大乎著龜。

すさまじい稲光が雲中を猛烈に走り、（雨の上があったそのあと）長い虹が天の彼方まで架かっている。自然は忽然と変化して常なる時はなく、たまたま曇りと晴れがピタリと来た。君子は義と命とに照らし、順序正しき立場を踏むので、躓き倒れることはない。僥倖の人は沢山いようが、ああ、なんとその寵祿のために身を滅ぼしてしまったことか。龍のごとく玄深なる老子も、ゆき過ぎを戒めているし、すばらしいことだ、天下の吉凶を知らせる卜筮術は。

其七

- 1 檜柏高参天 檜柏高く天に参りいた
- 2 常爲藤羅欺 常に藤羅に欺かる
- 3 勁心炤古色 勁き心は古色に炤き
- 4 直幹無曲枝 直き幹は曲枝なし
- 5 柔條善依附 柔條として善く依附し
- 6 瞬息密葉滋 瞬息にして密葉滋し
- 7 主人命剪伐 主人 剪伐を命ずも
- 8 焉知根不離 焉くんぞ知らん 根は離れざるを
- 9 運斤一以下 斤を運らし 一に以て下せば
- 10 去蠹木乃虧 蠹を去りて 木乃ち虧かけん
- 1 [汪克寛「夫子之牆賦」] 榲楠連雲而蒼鬱 檜柏参天而扶疎
- [曹植「送應氏詩」] (文選卷二十) 垣牆皆頓擗 荆棘上参天 李善曰、孟子曰太山之高、参天人雲。
- 2 [孫覲「吳門道中詩」] 数声好鳥不知處 千丈藤羅古木香
- 3 [駱賓王「浮查」] 貞心凌晚桂 勁節掩寒松
- [王安石「崑山慧聚寺次孟郊韻詩」] 掃石出古色 洗松納空光
- 4 [丘遲「題琴朴奉柳吳興」] 清心有素體 直幹無曲枝
- 5 [左思「雜詩一首」] 柔條旦夕勁 綠葉日夜黃
- [陶潛「形影神」神積] 與君雖異物 生而相依附
- 6 [陸機「招隱詩」] 輕條象雲構 密葉成翠幄
- 7 [杜甫「苦竹」] 軒墀曾不重 煎伐欲無辭
- 8 [雍陶「河陰新城」] 五里似雲根不動 一重如月暈長圓
- 9 [莊子・徐無鬼] 匠石

10 [沈約「齊故安陸昭王碑文一首」] (文選卷五十九) 首鼠彊界 災蠹彌廣。李善曰、說文蠹、木蟲也。以喻殘賊。

檜は空高く天にとどくほどに伸びているが、いつも藤羅が巻き付いている。ものに負けない勁い心の檜は古色輝き、まっすぐな幹には曲がった枝もない。若く柔らかな枝がたくさん幹によりついて、たちまちのうちに、みっしりと葉が生い茂った。主人は(陽を遮る大きな)檜を煎伐するようにと命じたが、どうして根がしっかりと残っているのが分からないのだろうか。斤を一刀のもとに振り下ろし切れば、それとともに木食い虫も去ったが、木は方は少し痛んだだけだ。

其八

- 1 海燕春始來 海燕 春 始めて來たり
- 2 朔鴈秋云歸 朔雁 秋云めり帰る
- 3 各生大塊間 各、大塊の間に生き
- 4 寒暑相因依 寒暑には相因り依る
- 5 既爲萬物母 既に萬物の母のために
- 6 寧使本性違 寧くんぞ本性を違はしめんや
- 7 鳧頸善用短 鳧頸 善く短きを用ひ
- 8 續之常苦悲 之を續げば常に苦悲せり
- 9 甚感裁成慈 甚だ裁成の慈に感ずるも
- 10 所惜非天機 惜しむ所 天機に非ざる
- 11 見美乃亂群 美を見て乃ち群を乱し
- 12 玄造慎幾微 玄造 幾微を慎む
- 1 [李紳「江南暮春寄家詩」] 江鴻斷統翻雲去 海燕差池拂水回

2〔江總「并州羊腸坂」〕驚風起朔鴈 落照尽胡桑

3〔莊子・大宗師〕夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死。

4〔周易・繫辭下傳〕寒往則暑來、暑往則寒來、寒暑相因依。

〔阮籍「詠懷詩」其十〕迴風吹四壁 寒鳥相因依

5〔老子・第一章〕無名、天地之始、有名、天地之母。

6〔杜甫「柴門」〕万物附本性 約身不顧客

7〔莊子・駢拇〕是故覺脛雖短、統之則憂、鶴脛雖長、斷之則悲。故性

長非所斷、性短非所統、無所去憂也。

8〔古詩「爲焦仲卿妻作」〕十七為君婦 心中常苦悲

9〔謝瞻「張子房詩一首」〕神武陸三正 裁成被八荒 李善曰、周易（泰）

曰天地交泰。后以裁成天地之道、輔相天地之宜、以左右民。

10〔陸機「文賦」（文選卷一七）〕方天機之駿利、夫何紛而不理。李善曰、

莊子（秋水）曰今動吾天機、而不知其所以然。司馬彪曰天機自然也。

又（大宗師）曰嗜欲深者、其天機淺。

11〔莊子・齊物論〕毛嬙麗姬、人之所美也。魚見之深入、鳥見之高飛、

麋鹿見之決驟。

〔莊子・山木〕入獸不乱群 入鳥不乱行。

12〔庾信「代人乞致仕表」〕明憲不敢以纖負、玄造竟微于滴助。

燕は春やってきて、鴈は秋にめぐり帰ってくる。おのおの大自然の中  
で生を享け、寒暑には身を寄せ合って助け合う。すべて万物の母によつ  
て存立しているので、どうしてそれぞれ本性と違うことがあるのか。鴨

の首は短い（使うのが上手で）これを長く延ばしてやると鴨は常に苦  
しみ悲しむことになる。体裁よく整えてやろうとする恵みの心は、誠に  
有り難く感ずるが、惜しいことに、そうすれば、自然さを失ってしま

う。人から見れば美人でも、鳥や獸が会えば群れをみだすもので、天意

の前では、ほんの少しのことでも慎まねばならぬ。

其九

1 北風勁天地 北風 天地に勁く

2 玄秋變此晨 玄秋 此の晨より變ず

3 草木掩黃落 草木掩ひらく黄ばみ落ち

4 墜葉紛一振 墜葉 紛として一たび振るふ

5 朝露察危幾 朝露 危幾を察し

6 所貴在哲人 貴ぶ所 哲人に在り

7 張翰起歸思 張翰 歸思を起こし

8 取與非鱸蓴 取与 鱸蓴に非ず

9 懷寶實可懼 宝を懷くは實に懼るべし

10 何況履要津 何ぞ況んや要津を履むをや

11 君看金谷賫 君看よ 金谷の賫

12 乃使途路嘖 乃ち途路をして嘖らしむ

1〔古詩十九首〕孟冬寒氣至 北風何慘慄

〔顏延年「陽給事誄」〕涼冬氣勁 塞外草衰

2〔揚雄「校獵賦」〕於是玄月季月、天地隆烈、万物權輿於内、徂落於  
外。

3〔漢武帝「秋風辭一首」〕秋風起白雲飛 草木黃落兮鴈南歸

4〔張彦「勝露賦」〕聞墜葉而歎息 对雲而愁起

5〔阮籍「詠懷詩」其七十二〕壯年以時逝 朝露待太陽

〔陸機「豪士賦序」〕衆心日移、危機將發。

6〔班固「幽通賦」〕所貴聖人至論兮 順天性而斷諠



〔顔延年「陶徵士誄」〕哲人卷舒 布在前載

7〔白居易「端居詠懷」〕賈生俟罪心相似 張翰思歸事不如

〔晋書・張翰傳〕翰因見秋風起、乃思吳中菰菜・蓴羹・鱸魚膾。曰、人生貴得適志、何能羈宦數千里以要名爵乎。遂命駕而歸。

8〔司馬遷「報任少卿書」〕愛施者仁之端也。取與者義之表也。

9〔王褒「四子講德論并序」(文選卷五一)〕幸遭聖主平世、而久懷寶。李善曰、論語陽貨謂孔子曰、懷其寶而迷其邦、可謂仁乎。

10〔古詩十九首〕何不策高足 先據要路津

11〔石崇「金谷詩序」〕余以元康六年、從太僕卿出為使持節監青徐諸軍事、有別廬在河南懸界金谷澗。時征西大將軍祭酒王詡當還長安、余與衆賢、共送澗中、賦詩以叙中懷。

〔新唐書・員半千傳〕上書自陳臣家貧、不滿千錢。

12〔周易・繫辭下傳〕天下何思何慮。天下同歸而殊塗。正義曰、天下万事終則同歸於一。但初時殊異其塗路也。

〔沈約「六憶詩」〕笑時応無比 曠時更可憐

北風が天地をつよく吹き荒れ、秋は今朝から冬へと変わってゆく。草木はあちらこちらで黄ばみ落ち、落葉も一しきり風に翻って舞う。見る見るうちに朝露に身の危機を察知し、大切に思うのは哲人のことだ。張翰は禍を避けて帰郷の念を起こしたのであって、選び取ったのは鱸魚の膾や蓴羹のためではなかった。宝のごとき大才を懐いて野にある人は実に恐るべき人物であるが、まして主要の地位にある人ならいまでもない。ほら、あの金谷に別荘を構えた石崇の資力は大き過ぎたので、何と当路の人を嗔らすことになった。

其十

1 希聲賞雅奏 希聲 雅奏と賞せられ

2 重器無繁音 重器 繁音なし

3 北里盛師涓 北里 師涓盛んなり

4 麗曲妖以淫 麗曲 妖にして以て淫

5 神鼎鑄金鏞 神鼎 金鏞を鑄

6 懸寓久浮沈 寓に懸けて久しく浮沈せり

7 萬物貴同氣 万物 同氣を貴び

8 蜀桐實所尋 蜀桐 実に尋ぬる所なり

9 但云叩不鳴 但だ云うのみ 叩きて鳴らずと

10 乃使瓦缶侵 乃ち瓦缶をして侵さしむ

1〔老子・第四十一章〕大器晚成、大音希聲、大象無形、道隱無名。

〔宋史・樂志〕嘉薦斯備、雅奏具揚

2〔孟子・梁惠王下〕毀其宗廟、選其重器

〔謝靈運「會吟行」〕六引緩清唱 三調佇繁音

3〔阮籍「詠懷詩」其十二〕北里多奇舞 濮上有微音

〔王讚「雜詩」〕師涓久不奏 誰能宣我心

4〔晋書・文苑傳序〕窮廣内之青編、緝平臺之麗曲

5〔嵇康「雜詩一首」〕鸞觴酌醴 神鼎烹魚

〔張衡「東京賦」〕設業設虛、宮懸金鏞

6〔阮籍「詠懷詩」其十二〕輕薄閑遊子 俯仰乍浮沈

7〔尚書・泰誓〕惟天地万物之母、惟人万物之靈。

8〔任昉「爲齊明帝讓宣城郡公第一表」(文選卷三八)〕世祖武帝情等布衣、寄深同氣。李善曰、曹植「求自試表」(文選卷三七) 誠與國分形同

氣、憂患共之者也。」

〔李賀「李憑箏篋引」〕吳絲蜀桐張高秋 空白凝雲頽不流

9〔水經注・漸江水〕異苑曰、晋武帝時、吳郡臨平岸崩、出一石鼓、打之無聲、以問張華。華云、可取蜀中桐材、刻作魚形、叩之則鳴矣。於是如言、聲聞數十里。

10〔李商隱「行次西郊作一百韻」〕濁酒盈瓦缶 爛穀堆荆園

極めて微かな音声も高雅な演奏として賞せられ、宝物の楽器で音色豊かな音楽を奏することもない。北里では亡国の音楽とされた師涓のごとき楽曲が盛んに演奏され、華麗な音曲は妖艶ではなはだ度を過ごしている。精妙なる鼎で金の大鐘を鑄て、それを久しい間、高く低くつり下げている。ものみな気を同じくすることを貴び、それを叩くあの蜀桐を尋ね求めた。ただ、叩いてもよい響きで鳴らないので、何と酒壺にとつて代わられたということだ。

其十一

1 皎皎天女星 皎皎たる天女星

2 雲錦爛七襄 雲錦爛めき七襄す

3 一織衣十人 一たび衣十人を織り

4 祈寒道相望 祈寒 道 相望む

5 豈無乞巧術 豈に乞巧の術なからんや

6 明河照縫裳 明河 縫裳を照らし

7 尚方重絺繡 尚方 絺繡を重んず

8 費日刺文章 日を費して 文章を刺(繡)す

9 蠶桑曠所業 蠶桑 業とする所を曠め

10 織婦徒倉皇 織婦 徒だ倉皇たるのみ

11 唐風譏織手 唐風 織手を譏り

12 無乃儉德涼 乃ち徳を儉かにして涼しむことなからんや

13 始知三五世 始めて知る 三(皇)五(帝)の世

14 機絲有餘箱 機絲 餘箱あるを

1〔古詩十九首〕迢迢牽牛星 皎皎河漢女

2〔江淹「雜體詩三十首」〕謝臨川・遊山〕赤玉隱瑤溪 雲錦被波汭 李善曰、海賦曰、雲錦散文於沙汭之際。

3〔顏延年「夏夜呈從兄散騎車長沙一首」〕〔文選卷二十六〕九逝非空思 七襄無成分 李善曰、韓詩曰、跛彼織女 終日七襄 雖則七襄 不成 報章

4〔尚書・君牙〕冬祈寒、小民亦惟曰怨咎

〔曹丕「燕歌行」〕牽牛織女遙相望 爾獨何辜限河梁

5〔荆楚歲時記〕七夕婦女結綵縷、穿七孔針、或以金銀鑰夕爲針、陳瓜果於庭中以乞巧

6〔歐陽修「秋聲賦」〕星月皎潔 明河在天

〔毛詩・魏風・葛屨〕摻摻女手 可以縫裳

7〔漢書・百官公卿表〕少府屬官、有鈞眉・尚方・御府。

〔陳深「曹叔端見過索錢篇」〕詞華爛絺繡 問學滋新畝

8〔禮記・哀公問〕有成事、然後治其雕鏤、文章黼黻以嗣。

9〔玉臺新詠・日出東南隅行〕羅敷善蠶桑 采桑城南隅

10〔張華「博物志」卷三〕遙望宮中多織婦、見一丈夫、牽牛渚次飲之。

〔抱朴子・正郭〕倉皇不定

11〔春秋左氏傳・襄公二十九年〕爲之歌唐。其有陶唐氏之遺民乎。不然 何其憂之遠也。非令德之後、誰能若是。

〔毛詩・唐風・蟋蟀〕蟋蟀、刺晋僖公也。儉不中禮、故作是詩以憫之。欲其及時以禮自虞樂也。此晋也而謂此之唐、本其風俗。憂深思遠、儉而用禮、乃有堯之遺風焉。

〔徐陵「玉臺新詠序」〕魏國佳人、俱言訝其織手。

12〔周易・否〕象曰、天地不交否。君子以儉德避難。不可榮以祿。

〔江淹「別賦」〕（文選卷十六）巡曾楹而空、撫錦幕而虛涼 李善曰、涼、悲涼也。

13〔班固「東都賦」〕（文選卷一）勲兼乎在昔、事勤乎三五。李善曰、史記（孔子世家）楚（令伊）子西曰「令孔丘述三五之法、明周召之業。」

春秋元命苞曰、伏羲・女媧・神農爲三皇。史記五帝本紀曰、黃帝・顓頊・帝嚳・帝堯・師舜也。

14〔杜甫「秋興八首」〕織女機絲虛夜月 石鯨鱗甲動秋風

夜空に皎々と輝く織女星は、雲の縫い取りをした五色の錦をきらめかすように軌道を移してゆく。織女がたび織れば、十人分の衣を織ることができ、大いに寒い冬の間は、天河の河道の傍らで牽牛を相望むだけ。どうして乞巧の術が無いことがあるう。あの天河が裳裾を縫う織女を照らしているのだから。宮廷の御物を蔵する尚方では、彩色の縫い取りを貴重としており、織女は幾日も日を費して、文様を縫い取りしている。桑を植えて蚕を飼う業は大きく、織女はただもう慌ただしく機織りするばかり。確かに唐風の「蟋蟀」は、織女の慎ましやかな手振りを諷刺しているが、かえって自己の才徳を控えめに悲しむことにならないだろうか。ここに至って始めて、三皇五帝の御世では、機織り糸は一杯余分の箱に蓄えられていたのだと分かった。

其十二

1 甬里本農夫 甬里 本と農夫

2 言耕商於阿 商於の阿に耕すと言ふ

3 雨暘以時至 雨暘 時を以て至る

4 歲月號年和 歲月 年和と號ぶ

5 秋雯照禾黍 秋雯 禾黍照り

6 微風岐穗多 微風 岐穗多し

7 秦法重苛斂 秦法 苛斂を重んじ

8 山深吏不過 山深くして 吏も過らず

9 高臥長巖下 高臥す 長巖の下

10 乃詠康衢歌 乃ち詠ず 康衢の歌

1〔資暇集〕上〕漢四皓、其一號角里、角音祿。今以角音呼、乖也。

2〔王安石「書汜水閔自寺壁」〕如何咫尺商於地 便有園公綺季閑

3〔魏書〕天象誌三〕皆雨暘失節、萬物不成候也。

〔眞德秀「社稷神風雷雨師城隍諸廟祝文」〕春秋之交、雨以時至。此豐年之祥。

4〔庾信「羽調曲」〕火中乃寒乃暑 年和一風一雨

5〔徐紡「懷人詩」九首〕甬里有髯叟 幽棲稱隱君……俯仰十六年 所志高秋雯

〔白居易「秋遊原上」〕（白氏文集・卷六）是時新雨足 禾黍夾道青

6〔茗齋集〕麥花〕兩岐穗吐金支上 四月寒生細浪前

7〔劉克莊「商翁」〕誰言秦法密 網不得商翁

9〔世說新語〕排調〕卿屢違朝旨、高臥東山。諸人每相與言、（謝）安石不肯出、將如蒼生何。今蒼生將如卿何。謝笑而不答。

10〔賂賓王「上吏部侍郎帝京篇啓」〕觀梁父之曲、讖臥龍於孔明。聽康衢之歌、得飯牛於寧戚。

漢初の隱士用里先生はもともと農夫であり、商於山の山裾で耕していたと言われる。雨天と晴天とそれぞれ時節にやってきて、歳月は「年和やか」と呼ぶ。秋の高い青天のもと、穀物は照らされ、穂先にはそよ風が吹くことが多い。秦の法は嚴格苛斂であるが、山深いところにまで官吏は訪れることもない。長大巨岩のもとに悠々と暮し、なんと（春秋・齊の寧戚が歌ったと云う）康衢の歌を詠じているのだ。

## 其十三

- 1 歩兵稱至愼 歩兵 至愼と稱ばれ  
 2 常爲詠懷詩 常に詠懷詩を爲る  
 3 生逢魏晉間 生きて魏晉の間に逢ひ  
 4 長醉無醒時 長しく酔て醒むる時なし  
 5 發狂忽痛哭 狂を發し忽ち痛哭  
 6 非不有所思 思う所あらずんば非ず  
 7 謂天亦以高 天亦た以て高しと謂ひて  
 8 跼蹐欲向誰 跼蹐して誰に向はんと欲す  
 9 微雨潤幽草 微雨 幽草を潤し  
 10 榮枯各自知 榮枯 各自 知る

1〔世説新語「德行」〕晋文王稱阮嗣宗至愼。每與之言、言皆玄遠、未嘗臧否人物。

2〔晋書・阮籍伝〕籍能屬文、初不留思。作詠懷詩八十餘篇、爲世所重。  
 3〔晋書・阮籍伝〕籍本有濟世志、屬魏晉之際、天下多故、名士少有全

者、籍由是不與世事、遂酣飲爲常。文帝初欲爲武帝求婚於籍、籍醉六十日、不得言而止。

5〔晋書・阮籍伝〕時率意獨駕、不由徑路、車迹所窮、輒慟哭而反。  
 6〔錢謙益「甲子秋北上渡淮寄里中游好」〕初學集・卷二〕天涯我亦憐同病 落日蒼涼有所思

7〔毛詩・小雅・正月〕謂天蓋高 不敢不跼 謂地蓋厚 不敢不踣  
 8〔謝玄暉「京路夜發一首」〕文選・卷二七〕勅躬每跼蹐 瞻恩唯震蕩  
 9〔江淹「雜體詩三十首」〕王侍中〔文選・卷三一〕鶴鷄在幽草 客子淚已零

10〔白居易「郡庁有樹、晚榮早凋、人不識名、因題其上」〕白氏文集・卷十〕榮枯各有分天地本無情

阮籍は司馬文王（昭）から至愼と称せられ、いつも詠懷詩を作った。曹氏の魏から司馬氏の魏へとの時代の変わり目に人生を送り、長い間いつも酔っぱらって醒めるときがないようにした。狂わんばかりの振る舞いから、たちまち悲しみの中で痛哭するほどで、思うところが無かった訳ではない。天は高いとは云うものの、恐れびくびくして誰に向えようか。そば降る雨に物思いの草も湿り、榮枯盛衰はそれぞれ分るものだ。

## 其十四

- 1 羌本名家子 羌は本と名家の子  
 2 雅志好詩書 雅志 詩書を好む  
 3 傑材傲棟梁 傑材 棟梁に傲たり  
 4 美器重璠璣 美器 璠璣と重ぜらる  
 5 秦皇尚武略 秦皇 尚ほ武略あり  
 6 卿相皆吏胥 卿相も皆吏胥たり



7 両生相竊議 両生相竊かに議し

8 坑者四百餘 坑うめし者 四百餘

9 儒冠若弊帚 儒冠 弊帚の如く

10 瓠落爲散樗 瓠のごとく落ち散樗と爲れり

11 起赴少年兒 起赴せる少年兒

12 紛紛乘高車 紛紛として高車に乗る

13 生無猿臂姿 生きて猿臂の姿なく

14 起視但歎歎 起ち視れば但だ歎歎するのみ

1〔史記・秦始皇本紀〕十八年、羌虜伐趙、端和圍邯鄲城。十九年、王翦、羌虜尽定取趙地東陽、得趙王。

〔陳師道「和謝公定觀秘閣文與可枯木」〕謝侯名家子 感慨形苦詞

2〔統漢書（太平御覽・卷三九四）〕李固少有儁才。雅志好學。

〔「風俗通義」孝文帝卷二〕孝成皇帝好詩書、通覽古今、間習朝廷儀禮、尤善漢家法度。

3〔莊子・人間世〕仰而視其細枝、則拳曲而不可以爲棟梁。

4〔江淹「傷愛子賦」序〕生而神俊、必爲美器。

〔逸論語（太平御覽八〇四）〕璠璵、魯之美玉也。孔子曰、美哉璠璵、遠而望之煥若也、近而視之瑟若也。説文引作「璠璠」、喻守之美。操

5〔後漢書・班超傳論〕時政平則文德用、而武略之士無所奮其力能。

6〔宋・董嗣杲「蕪湖縣詩」〕國庫轉虧商旅瘠 縣官頻易吏胥肥

7〔史記・秦始皇本紀〕侯生盧生相與謀曰、始皇爲人、天性剛戾自用。……丞相諸大臣皆受成事、……貪於權勢至如此。未可爲求仙藥・於是乃亡去。

8〔史記・秦始皇本紀〕犯禁者四百六十餘人、皆坑之咸陽。

9〔杜甫「奉贈韋左丞文二十二韻」〕紈袴不餓死 儒冠多誤身

10〔莊子・逍遙遊〕剖之似爲瓠、則瓠落無所容。

〔莊子・逍遙遊〕吾有大樹、人謂之樗、其大本雍腫、而不中繩墨、其小枝卷曲、而不中規矩、立之塗、匠不顧。

12〔漢書・于定國傳（卷七一）〕少高大門閭、令容駟馬高蓋車。我治獄有陰德、未嘗有所冤、子孫必有興車。

13〔史記・李將軍傳（李）〕廣爲人長猿臂、其善射亦天性也。

14〔柳宗元「寄許京兆孟容書」〕慄慄然歎歎惴惴

羌虜は本もと名家の出身、優雅な心の持ち主で詩書を読むことを好んだ。賢才ぶりは棟梁たちの上にのぼり、美玉の璠璵のごとく美器として貴ばれた。（しかしながら）秦の始皇帝は名うての武略を重んじ、臣下の公卿や宰相も胥吏のように軽んぜられた。侯生と盧生とは二人で示し合われ、四百人あまり穴埋め坑儒させた。儒学者たちも破れ箒のごとく瓠の崩れ落ちて散乱する樗木のようであった。勇ましく駆けつけた羽振りのよい小童たちは、それぞれ慌ただしく高蓋の車に乗って参内した。立ち上がって周りをみると、猿臂を振るうような有能の人は誰一人とていなくなり、（明日は我が身かと）ただ涙するばかり。

其十五

1 百年不易得 百年 得ること易からず

2 至人重長生 至人 長生を重んず

3 呂望八十餘 呂（尚）望 八十餘

4 乃爲文王迎 乃ち文王の迎ふるところとなる

5 左手仗黃鉞 左手 黄鉞を仗き

6 虎視竟專征 虎視 竟に專征せり



- 7 親獻朝歌俘 親しく獻ず朝歌の俘  
 8 意氣何盈盈 意氣何ぞ盈盈たる  
 9 伯夷叩馬諫 伯夷 馬を叩きて諫め  
 10 所見詎庭楹 見るところ 詎んぞ庭楹ならん  
 11 至今餓欲死 今に至るまで餓え死せんとす  
 12 日暮採微英 日暮 微英を採る

1〔蘇軾「次前韻寄子由」〕我少即多難 遭回一生中 百年不易滿 寸寸彎強弓

2〔鮑照「昇天行」(文選卷二八)〕窮塗悔短計 晚志重長生

3〔史記・齊太公世家〕吾太公望之久矣。故号之曰太公望。載與俱歸、立為師。

5〔史記・齊太公世家〕文王崩。武王即位。九年欲修文王業。東伐以觀諸侯集否。師行。師尚父左仗黃鉞、右把白旄。

6〔竹書紀年〕王錫命西伯得專征伐。

7〔司馬光「司馬溫公稽古錄」卷七〕辛是爲紂王。紂王都朝歌。

9〔史記・伯夷列伝〕伯夷・叔齊叩馬而諫曰、父死不葬、爰及干戈。可謂孝乎。以臣弑君、可謂仁乎。

10〔毛詩類積〕庭楹正冥 朱伝、庭宮寢之前庭楹柱也。

11〔史記・伯夷列伝〕義不食周粟。隱於首陽山。采薇而食之。及餓且死、作歌。

12〔史記・伯夷列伝〕其辭曰、登彼西山兮 采其薇矣。以暴易暴兮 不知其非矣。神農虞夏忽焉没兮 我安適歸矣 于嗟徂兮 命之衰邪。

遂餓死於首陽山。

人生百年を遂げるのは、容易なことではなく、この上ない聖人も長生

を大事なことを考えた。太公望・呂尚は何と八十歳で文王に迎えられた。左手には黄鉞を仗き、虎視眈々と専征した。朝歌に遷都していた紂王を捕らえて周に献上し、呂尚は何と意気満々であったことか。(それに対し)伯夷・叔齊は武王の馬首を引き叩いて諫めたが、見たところ庭中柱となりえなかった。今に至るまで餓え死にしそうである、日暮にまで微英を採取するだけでは。

#### 其十六

1 長卿厭朝謁 (司馬) 長卿 朝謁を厭ひ

2 謝病遊大梁 病と謝して大梁に遊ぶ

3 當其不適意 其の意に適せざるに当たり

4 零落似秋霜 零落 秋霜に似たり

5 一旦奉使蜀 一旦 使を蜀に奉じ

6 高車何輝煌 高車 何ぞ輝煌たる

7 昔時卓王孫 昔時 卓王孫

8 趨馬伏道傍 馬を趨らせ道傍に伏す

9 文君本婦人 文君本、婦人

10 擇交得鳳凰 交を択び鳳凰を得

11 分財巨千萬 財を分つ 巨千萬

12 先後若素蒼 先後 素蒼の若し

13 冠蓋固自貴 冠蓋 固自貴し

14 乃以重綱常 乃ち以て綱常を重んず

1〔史記・司馬相如伝〕會景帝不好辭賦、是時梁孝王來朝、從游説之士

齊鄒陽・淮陰枚乘・呉莊忌太子之徒、相如見而説之、因病免、客游梁。

3〔阮籍「詠懷詩」其五十九〕 夸名不在己 但願適中情

4〔史記・司馬相如伝〕 會梁孝王卒、相如歸、而家貧、無以自業。

〔阮籍「詠懷詩」其十六〕 悅懌若九春 磬折似秋霜

5〔史記・司馬相如伝〕 天子以為然、乃拜相如為中郎相、建節往使。

6〔白居易「郡中即事」(白氏文集卷八)〕 為報高蓋車 恐非真富貴

7〔史記・司馬相如伝〕 於是卓王孫・臨邛諸公皆因門下獻牛酒以交驩。

8〔統漢書(太平御覽・卷四〇)四人事部「師」〕 潜伏道傍候車駕過

9〔史記・司馬相如伝〕 及飲卓氏、弄琴、文君窃從戶窺之、心悅而好之、

恐不得當。

10〔史記・司馬相如伝〕 相如乃使人重賜文君侍者通慫慫。文君夜亡奔相

如。

11〔史記・司馬相如伝〕 卓王孫不得已、分子文君僮、錢百萬、及其嫁時

衣被財物。文君乃與相如歸成都、買田宅、為富人。

12〔王夫之「擬阮步兵詠懷」〕 心顏誠自我 雲容悲素蒼 耿耿霜月霽 長

嘯驚八荒

13〔杜甫「夢李白」〕 冠蓋滿京華 斯人獨顛顛

14〔宋史四三八「葉味道傳」〕 正綱常以勵所學 用忠言以充所學。

〔史記・司馬相如伝〕 與卓氏婚、饒於財。其進仕宦、未嘗肯與公卿國

家之事、称病閑居、不慕官杓。

司馬相如は、文学嫌いの景帝お目通りの朝謁が嫌いで、病氣と偽って賓客とともに梁の孝王のところへ客遊した。梁の孝王亡き後、志も遂げることができず、秋の霜のように零落していた。一旦、天子の使いを奉じて蜀に使いし、乗車した高蓋車は光輝いていた。

その初め、臨邛の卓王孫は司馬相如を歓待するため諸公たちと道ばたに待機した。娘の卓文君はもともと寡婦であり、交友の人を選び鳳凰た

る司馬相如と夫婦となった。卓王孫も結局は何千万の財産を文君たちに分け与え、相如の家は素寒貧から大青空となった。冠蓋とは本来高貴なものであるのだから、三綱五常を重んじてこそそのものなのだ。

其十七

1 黍稷在高陵 黍稷 高陵に在り

2 含鬱如有思 含鬱 思ひあるがごとし

3 月令發晨風 月令 晨風発し

4 平疇默無私 平疇默して私なし

5 上與桃李蹊 上は桃李の蹊に与かり

6 相間生華滋 相ひまに華滋生ず

7 萬物各自媚 萬物 各自媚なり

8 誰肯獨後時 誰か肯へて獨り時に後れんや

1 〔毛詩・王風・黍離〕 彼黍離離 彼稷之苗

〔方文「喜龔孝升都憲至」詩之二〕 每涉江淮路 偏多黍稷情

〔張載「七哀詩」(文選卷二十三)〕 北芒何壘壘 高陵有四五

2 〔朱熹「登面山亭」〕 煙鬢稍呈露 衆嶺方含鬱 長歎天風來 雲散空宇

碧 3 〔唐・庾光先「奉和劉采訪縉雲南嶺作」〕 鳥訝山經伝不盡 花随月令数

乃稀

4 〔陶潜「癸卯歲始春懷古伝舍」〕 平疇交遠風 良苗亦懷新

5 〔阮籍「詠懷詩」其五〕 嘉樹不成蹊 東園桃與李

6 〔古詩十九首(文選卷二十九)〕 庭中有奇樹 緑葉發華滋

〔歐陽修「六一詞」玉樓春〕 洛陽生植方非節 穠艷清香相間發

8〔岑參「佐郡思舊游」〕同類皆先達 非才獨後時 庭槐宿鳥亂 階草夜  
虫悲 白髮今無數 青雲未有期

黍稷は高陵によく育っている、うっそうと思いがあろうだ。月令どおり時の移りかわりに随ってすがすがしい朝の風がふき、目前のうねうねは静かで無私の境地である。上に優れた人が居れば自ずと桃李の小径が通じ、その間ままた花が滋るほどに咲き乱れる。万物おのおのが魅力的なもの、誰が時に乗り遅れようとするだろうか。

## 其十八

1 七國奉強秦 七國 強秦を奉じ  
2 辛衍來自梁 辛衍 梁より来る  
3 陳情祠冠帶 陳情して冠帶を祠らんと  
4 使者日相望 使者 日、相ひ望む  
5 魯連感義氣 魯仲連 義氣に感じ  
6 矯首辭清揚 矯首して 辭は清く揚る  
7 諸君果致帝 諸君 果して帝に致さん  
8 無乃謀不臧 乃ち謀りて臧らざるなからんや  
9 讒臣將處國 讒臣將に國に處らんとし  
10 孽妾當充房 孽妾當に房に充てらるべし  
11 微軀不忍見 微軀 見るに忍びず  
12 東去委滄浪 東のかた去りて滄浪に委ぬ  
13 客卿聞此語 客卿 此の語を聞き  
14 豁然起膏肓 豁然として膏肓起さん  
15 一時願罷去 一時 罷め去らんと願ひ  
16 大號竟微茫 大號 竟に微茫ならん

1〔戦国策・燕策一〕今燕雖弱小、強秦之少婿也。王利其十城、而深與強秦爲仇。

2〔史記・魯仲連傳〕魯仲連曰、吾始以君爲天下賢公子也、吾乃今然後知君非天下之賢公子也。梁客新垣衍安在。

3〔韓非子・有度〕兵四布於天下、威行於冠帶之國。

4〔杜甫「有感」五首〕諸侯春不貢 使者日相望 注曰、董仲舒傳、漢家使者冠蓋相望。

5〔魏徵「出關作」〕季布無二諾 侯嬴重一言 人生感意氣 功名誰復論

6〔史記・魯仲連傳〕歸而言魯連、欲爵之。魯連逃隱於海上、曰、吾與富貴而誦於人、寧貧賤而輕世肆志焉。

〔蘇軾「帰乎来集辞十首」〕矯首獨傲世 委心懷樂天 農夫告春事 扶老向良田

8〔毛詩・邶風〕百爾君子 不知德行 不忮不求 何用不臧

9〔韓非子・愛臣〕人臣處國無私朝、居軍無私交。

10〔楚辭・九思・哀歲〕椒瑛兮涅汚 藁耳兮充房 注曰、藁耳惡草名也。充房侍近君也。

11〔杜甫「往在」〕微軀添近臣 景從陪群公

12〔孟子・離婁〕有孺子歌曰、滄浪之水清兮可以洗我纓。滄浪之水濁兮可以洗我足。

14〔朱子「題謝少卿藥園」〕再拜藥園翁 何以起膏肓

16〔李白「古風」其一〕龍虎相啖食 兵戈逮狂秦 正聲何微茫 哀怨起騷人

春秋時代の七國は強くなった秦を恐れて奉ずるようになり、客將軍として辛衍（新垣衍）は魏王に使わされて（趙に）やって来た。彼は（平原君を通じて）趙王に秦の冠帶を祀るようにと陳情し、（趙が秦を帝と

するよう) 使者たちは日きりなしである。(たまたま趙に来ていた) 魯仲連は義気に感じる士、頭かうくを上げて発言は潔癖。諸君、果たして王に忠を尽くしているのか、国のための謀が好くはないのか。讒言をする臣下ばかりが国に仕えようとすると、身分の卑しい女が帝のそば近くに侍っている。微軀なる私は見るに忍びず、東南方に去って滄浪の水に身を委ねよう。客人辛垣衍がこの言葉を聞きつけ、心悟ったかのように膏肓の病気起こしてもよいとし、その時かぎりやで罷めて立ち去りたいと願ったので、大号令もついに微かなものになった。

## 其十九

- 1 高原落日黄 高原 落日黄なり
- 2 蕭蕭鳴病馬 蕭蕭として病馬鳴く
- 3 似感主將恩 主將の恩に感ずるに似たり
- 4 戦死北邙下 北邙の下に戦死せり
- 5 放銜取故道 銜を放ちて故道を取る
- 6 至性蓋以寡 至性蓋し以て寡し
- 7 天閑收駿骨 天閑うまや 駿骨を収め
- 8 龍種懐中野 龍種 中野に懐く
- 9 豈無芻與粟 豈に芻まぐさと粟あわとなからんや
- 10 長涙盈羈把 長涙 羈把したぐらに盈てり
- 11 君子師萬物 君子 萬物を師とし
- 12 嗚呼戒苟且 嗚呼 苟且なるを戒む

- 1 (元・張憲「北風行」(玉笥集・卷三)) 山高落日黄 車重牛力殫
- 2 (杜甫「兵車行」) 車麟麟 馬蕭蕭

4 [陶潜「擬古」詩] 一旦百歲後 相與還北邙

5 [史記・項羽本紀] 長史欣恐、還走其軍、不敢出故道。

6 [嵇康「與山(濤) 巨源絕交書」] 阮嗣宗口不論人過、吾每師之、而未  
能及。至性過人、與物不傷。

7 [白孔六帖・馬(卷九十六)] 燕昭王以百金市駿骨、人知好駿馬、不遠  
千里而至。

[王士禎「馬」(漁陽山人精華錄)] 十二天閑立仗齊 何來龍種大宛西  
注 天閑、皇帝養馬之地。

8 [魏書・吐谷渾伝(卷一百一)] 青海周回千餘里、海內有小山。每冬水  
合後、以良牝馬置此山、至來春収此。馬皆有孕所生得駒、号為龍種。  
必多駿異。

9 [白居易「羸駿」(白氏文集・卷二)] 村中何擾擾 有吏徵芻粟

10 [庾信「烏夜啼」] 彈琴蜀郡卓家女 織錦秦川竇氏妻 詎不自驚長淚落  
到頭啼烏恒夜啼

[「木蘭詩」(樂府詩集・卷二五)] 東市買駿馬 西市買鞍轡

11 [文始眞經] 衆人師賢人 賢人師聖人 聖人師萬物

12 [蘇軾「策略三」] 天下獨患柔弱而不振、怠惰而不肅、苟且偷安而不知  
長久之計。

高原に落日は真つ黄色となつて沈み、病馬の鳴き声がヒーンヒーンと聞こえる。乗馬する士は主將の恩に感じたのであろうか、北邙の下に戦死した。馬の轡を放してやると、元の道を取って帰ろうとする、このようなこの上もない性の馬は思うにほとんどない。皇帝の馬牧場に駿馬を集めるが、(見殺しにされるので) 馬の親たる龍種も原野で嘆くばかり。どうして馬に与える芻まぐさと粟あわと無いはずもなからうに、死馬を悲しんで涙で手綱下倉までびっしょりとなる。賢人にとっては誰でも師とな



りうるのだ、ああ、苟且の判断は慎まねばならぬ。

## 其二十

- 1 往聞魯公扈 往に聞けり 魯の公扈  
 2 有友趙齊嬰 友なる趙の齊嬰あり  
 3 同時中疾疾 時を同じくして疾疾に中たり  
 4 乃就扁鵲營 乃ち扁鵲の營に就く  
 5 命坐飲狂酒 坐して狂酒を飲むを命ず  
 6 毒死不復生 毒死して復た生きず  
 7 探胸易府藏 胸を探り府藏を易へ  
 8 神藥感至精 神藥 至精に感ぜり  
 9 二子起辭歸 二子（公扈・齊嬰）起ちて辭し帰へるに  
 10 兩室相與争 兩室 相与に争ふ  
 11 所以古至人 所以に古の至人  
 12 感激貴天情 感激して天情を貴ぶ  
 13 人生有心期 人生 心期あり  
 14 委形豈足榮 委形 豈に榮とするに足らんや  
 15 一旦中變化 一旦 變化に中たれば  
 16 妻子難與期 妻子も与に期し難し

1〔列子・湯問〕魯公扈・趙齊嬰二人有疾。同請齊嬰求治。扁鵲治之。既同癒。謂公扈・齊嬰曰、汝襄之所疾、自外而干府藏者。固藥石之所已。今有偕生之疾、與体偕長。今為汝攻之何如。二人曰、願先聞其驗。扁鵲曰謂公扈曰、汝志彊而氣弱、故足於謀、而寡於斷、齊嬰志弱而氣彊、故少於慮、而傷於專。若換汝之心、則均於善矣。扁鵲遂飲毒酒、

迷死三日。剖胸探心。易而置之。投以神藥、既悟如初。二人辭歸。於是公扈反齊嬰之室、而有其妻子。妻子弗識、齊嬰亦反公扈之室。有其妻子、妻子亦弗識。二室因相與訟、求辯於扁鵲。扁鵲辨其所由。訟乃已。

11〔楊維禎「贈醫士莫仲仁序」〕（東維子文集・卷十一）余聞古至人者、有明而不視、聰而不聞、蓋養明于不視而無不視。蓋養聰于不聞而無不聞。

12〔荀子・天論〕天職既立、天功既成、形具而神生、好惡喜怒哀樂臧焉夫是之謂天情 注言人身。天職天功之所成立也。……天情所受於天之情也。

13〔白居易「戊申歲暮詠懷」〕（白氏文集・卷五七）龍尾趨朝無氣力 牛頭參道有心期

14〔莊子・知北遊〕舜曰、吾身非吾有也、孰有之哉。曰、是天地之委形也。

〔白居易「贈杓直」〕（白氏文集・卷五七）秋不苦長夜 春不惜流年 委形老小外 忘機生死間

16〔阮籍「詠懷詩」其五〕一身不自保 何況恋妻子

魯の公扈には、友人で趙の齊嬰がいて同じ時に疾疾に罹り、名医扁鵲に診てもらい二人とも治療してもらった。二人は坐って狂酒を飲むように命ぜられ、毒に当たって生き返らなかつた。それで、開胸し心を取り替えて、神藥を投与すると、効き目がすばらしく治つた。二人は立ち上がり扁鵲のところから辞去して帰宅したところ、二人の家室とは、人違いだと、（元の）主人を求めて訴訟がおこつた。だからこそ、古の至人は感激のあまり、心より衷心感謝して人の身を大事に考える。人生に心期するものがある以上、人としての我が身はどうして光榮なものとなせ



ようか。一旦にして変化に遭遇すれば、妻子の身もその安寧は期しがた  
いのだ。

## 其二十一

- 1 楊布昼出門 楊布 昼 出門し  
2 玄冠而素衣 玄くろき冠にして素しろき衣  
3 中途雨澤下 中途 雨沢下り  
4 倉皇易緇歸 倉皇として緇(衣)に易へて帰る  
5 其狗吠發狂 其の狗吠えて 狂発せんばかり  
6 搏噬非故儀 搏つかみ噬かむこと 故儀にあらず  
7 監茲犬馬心 茲の犬馬の心を監み  
8 參養懷所私 參養 私する所を懷ふ  
9 狂吠出至誠 狂おしく吠へ 至誠を出し  
10 好惡良無欺 好惡 良に欺くことなし  
11 人生感新舊 人生 新旧に感じ  
12 乃不辨素緇 乃ち素緇を辨ぜざらんや

1〔韓非子・説林下〕楊朱之弟楊布、衣素衣而出、天雨緇衣而反。其狗  
吠之。布恐將擊之。(楊)朱曰、使汝狗白而往、黑而來、子豈能母怪  
哉。

2〔羅惟録〕請上素衣經帶、十二日乃更服玄冠素衣、通二十七日、百  
官素衣經帶、随西角門。

3〔歸震川「項脊軒志」〕百年老屋塵泥滲漉雨澤下注。

4〔吳偉業「避亂六首」〕予也倉皇歸 一時携百口

6〔幽明録〕此鷹軒頸瞳目遠視雲際、無搏噬之志。

7〔史記・三王世家〕臣窃不勝犬馬之心。

〔王安石「寄二弟時往臨川」〕持此犬馬心 千里不得將

8〔論語・為政〕今之孝者、是謂能養、至犬馬皆能有養、不敬何以別乎。

〔蘇徹「代張公安道乞致仕表」之一〕君臣之際、非獨以爵祿參養爲恩。  
進退之間、固將以名節始終爲意。

9〔蘇軾「擬孫權答曹操書」(經進東坡文集事略・卷五八)〕書詞勤款、若  
出至誠、雖三尺童子亦曉然知利害所在矣。

10〔韓愈「與崔群書」〕君子当有所好惡、好惡不可不明。

楊朱の弟である楊布は、昼間、黒の冠をかぶり白の上着で、家の門か  
ら出かけた。途中で雨が降り始めたので、あわてて黒の上着で帰ってき  
た。家の狗は狂わんばかりに吠えだて、飛び掛かり噛みつこうとするの  
も平時の仕方と異なる。このような犬馬の心を考えてみると、主に対す  
る孝養にはそれぞれ私的なものがある。狂おしいばかりに吠えるのも至  
誠の現れであるし、人の好悪は人を欺くような偽りのものではない。人  
生、新旧交代に感ずる以上、白黒を問題にする必要があるだろうか。

○二十一篇、気格高逸、逼李白詠古。其清理者入選。又其自然変化乃追  
〔古詩〕十九首。

二十一篇は気格高逸にして、李白の詠古(古風)に逼る。其の清理な  
る者選に入る。又其の自然変化は乃ち(古詩)十九首を追へり。

